



彼氏の様子がおかしいので
浮気を疑っていたら
性癖を抑えてただけで

「もう我慢
しない」

と甘々ドSに大変貌して
全力クリ調教されちゃいました

「凜くん凜くん、お弁当はー！？」

「もう持ったけど、どうかした？」

「待って待って！」

玄関の凜くんに慌てて駆け寄り、昨日作ったチョコチップクッキーの袋をお弁当入れに一緒に入れる。

凜くんは涼しげな目を細めて照れたように笑ってくれた。

「…唯華さんの作るチョコ好きって言ってたの、覚えてくれてたんだ」

「もちろん！ 溶けちゃうと困るからクッキーなんだけどね、これで今日もがんばって！」

「元氣一億倍。ありがと、唯香さん」

背の高い凜くんが屈むのに合わせて背伸びをすると、さらりと後頭部を撫でられてキスを落とされた。

囁くような声音で大好き、と言われて朝から幸せな気持ちになる。

「わたしも大好き、凜くん！ 行ってらっしゃい！」

同棲するようになってから一週間。

このやりとりを毎日しているはずなのだけれど、全然毎日嬉しいなあ、と思いながら手を振って見送った。

凜くんは私の彼氏で、仕事のできるエリート新人社員くんだ。元々私が勤めていた会社に入ってきた後輩で、私が教育係だった。そこから付き合うことになって、一週間前から凜くんの住むマンションに同棲させてもらうことになったんだけれど……

「……よしっ……！」

——私は今日、その凜くんの部屋を覗き見すると、決めている。

——彼氏の様子がおかしいので浮気を疑っていたら性癖を抑えてただけで「もう我慢しない」と甘々ドゥに大変貌して全力クリ調教されちゃいました——

発端は同棲するようになってからだった。

といっても凜くんは綺麗好きで家事もソツなくこなしてくれるし、生活する上でなにか不満に感じるようなことはない。ただ節々で、見ていたスマホの画面が私に見えそうになると急いで閉じたり…会社の電話って言っているけれど、どうも違うような電話をしているたり。

なにか、私に隠し事がありそうな感じがするのだ。

「失礼しまーす…」

そろそろと凜くんの部屋に入る。特にカギなんかもかけられていない、整然とした部屋。でも、ご飯できたよって声をかけにいくと慌てた様子で出てきたり…。

そういうシーンを思い出すと、どうしてももし浮気だったら…と考えるしまう。浮気

とまではいかなくとも、何か私に重大な隠し事があるのかも……とか。

とはいえ、凜くんは毎日たくさん……こちらが驚くほど愛情表現をしてくれるし、本当に私を好きでいてくれることは十分に伝わっている。

けれど、何かあるなら早めに知りたい。凜くんとちゃんと向き合っていくために、必要なことだと思う。

……ということ、引き出しの中を開けさせて頂いた。

「うーん、変なものは……、あ……っ！」

文房具やら書類やら、そういったものの奥にわたしの写真を見つけた。まだ会社員だったころのわたし……の、隠し撮りじゃないか？　これは。

こっそりこんなもの引き出しに入れているなんて可愛いなあ。凜くんは、なんて笑顔になりつつ、元に戻す。

やっぱり浮気の心配はなさそうかなあ……と思っていたと、凜くんが前に使っていたスマホを見つけた。

（確か、パスワードは…）

凜くんの手つきで覚えてしまったパスワードを入れていく。やっちゃいけないことだとは思いつつ、どうしてもスマホを急いで閉じている凜くんが頭にチラついてしまって、操作する手が止まらない。

メッセージの履歴や、写真を確認する。

私とのツーショット、私の寝顔、二人で行った場所の写真、私が書いたメモの落書き……。どれも私とばかりのもので、逆に愛されていることがわかってしまって恥ずかしい。

「……あれ……？」

ふと、だいぶ遡ったメディア欄に、真っ暗な映像があることに気づいた。なんだろう、これ。

日付を見ると私と付き合うよりも結構前のものだったので、もしかして前の彼女さんとか……？　と思いつながら、好奇心に負けて開いてしまった。すると。

「今日も一日、お疲れ様。よく頑張ったね。」

「ひえ……」

いつもより柔らかめな凜くんの声が響いて変な声が出る。

確か、学生の時に少しでも声の仕事をした、みたいに言ってたっけ。凜くん、いつもはもう少しクールな感じだからちょっと不思議……。

凜くんは見た目もすらっとしていて格好いいけど、声も低くて格好いい。

ボイスの内容は、どうやらお疲れの彼女を癒す、というようなお話だった。思わず聞き入ってしまう。

「ほら、おいで？　ぎゅーってしてあげる……ぎゅー、好き？　かわいいね、大好きだよ。」

ドキドキする気持ちと共に、私と付き合う前と言えど、こんなボイスを録っていたことに

複雑さを覚えてしまう。こんな甘い声で囁かれたらみんな買っちゃうじゃん、ずるいよ……。そう思いながらも再生する手が止められずにいると――

「こんなに触っていると我慢出来なくなりそう…疲れてるのに、ごめん…ちょっと、触らせて？」

「え、え…っ？」

あっという間になんだかきわどい展開になってきてしまった。衣擦れの音が聞こえて、水っぽい音も…もしかしてこれ、キスの音？

先程よりも低くなってきた声にドキドキしながら続きを聞く。

「隠さないで、可愛いおっぱい見せて……？」

「もうピンってしてる、かわいい…ここ、触ってほしそう。こら、隠しちゃだーめ…腕上げて？　そう、上手」

これ、完全にえっちなやつだ……！ と気付いても、聞くのをやめられない。

それどころか、えっちしている時の凜くんのことを思い出してしまってもじもじしてきてしまった。

どうしよう、と思いつながらぼーっと聞いていると、いやらしい水音が響いてびくっと肩が揺れる。

「乳首触っただけなのに、もう愛液でびしょびしょだね、ここ」

「クリ、好きだよね？ いっぱい触ってあげる」

「すごい声……ここもぐちょぐちょだね……クリ、ぴんぴんってされるの気持ちいい？」

「……、……」

スマホを持ったまま、ぺたりと床に座り込む。

ボイス通りに下半身に手を這わせる。すり、すり、と弱く擦るだけで、腰に熱が溜まってしまった。

だめ、ちゃんと足開いてて。皮剥いてトントンするとビクビクして可愛い……
ほら、トントン、トントン……こーら、逃げんな。ほら、ぎゅー……捕まえた。

「ん、う……っ♡」

興奮してしまう。凜くんは普段——こんなことを、言わない。

可愛いとか、好きとかは言ってくれるけど……優しく私の身体を触る感じで、こんな風にたくさん言葉で責めたりするようなことはない。

それも気持ちいいし、好きだなあって思っていたけれど……今は、その時とは違う言いようのない快感に襲われてしまっている。

ぬるぬるのクリ、裏筋からすりすりするよ……？ すりすり、すりすり……ふふ、身体びくびくしてる、気持ちいいね。

「……っん……♡」

ばくばくと鳴る心臓を片手で抑え、言葉通りに服の上からクリトリスをなぞる。気持ち良さに声が出るのを堪えながら、凜くんの甘い声を待ちわびている。

（私……凜くんの声聞いて、オナニーしちゃってる……っ）

恥ずかしいのにやめられなくて、かりかり♡ すりすり♡ と一人でクリトリスを擦る。じゅわりとナカが濡れてしまう感覚を覚えた、——その時だった。

ガチャリ、と玄関ドアの音が響く。

「~~~~っ?!?!?」

慌てて立ち上がり部屋から出ようとするものの、凜くんの部屋は玄関から近くのドアなのでもう詰んでいるようなものだ。どうしよう、と思いながらもとりあえず震える手で音声だけは停止させる。

（どうしよ、このまま隠れ……いや絶対無理、見つかる！ お掃除してたからとか……いや

お掃除道具なんてなにも持ってきてないよ!!」

「……ダメだ、どうして帰ってきたかはわからないけど……正直に、言おう。

私は腹を括ってそろそろと凧くんの部屋から出た。

「凧くん、おっ……おかえりなさい……っ」

「あ、唯香さん？　ただいま、取引先の都合で今日は急遽リモートになったって今知らされてさ……あれ？　てか、なんで俺の部屋……」

「じ、……ごめんなさい……っ!……!」

青ざめて謝る私の顔を見て驚きに目を見開く凧くん。

私は凧くんが何か隠し事をしているんじゃないかと思ったことと、それが気になって部屋に入ってしまったことを話した。

「そ、それで……何か、もし私に隠し事があったり、他の女の子のいいって思ってるんだとしたら、……早めに知りたいと思って……。でも、本当に良くないことをしました、ご

めんなさい……」

「唯香さん……ううん、俺こそ、ごめんね」

眉を下げて謝られて申し訳なさで泣きそうになってくる。凜くんは屈んで私を抱き締め、安心させるように頭を撫でてくれた。

「……不安にさせたのは俺だから。ごめん。他の奴がいいとかないよ、唯香さんだけ。……その、隠し事っていうのは……」

「う、うん……?」

「……唯香さんにだけは、まだ秘密なやつ、で勘弁してもらえる……? 完璧サプライズにしたかったんだけど、俺隠すのマジで下手だわ、ごめん……」

いつもクールであまり表情の変わらない凜くんが珍しく恥ずかしそうな表情をしている。察するに……私になにかサプライズをしようとした、ということだろうか。

「そ、そうだったんだ……! 本当にごめんなさい、凜くんのこと疑ってるとか……そんな

んじゃ、なかったのに……これからはちゃんと凜くんのこと信じるね。大好きだよっ、凜くん……!」

ぎゅうっと抱き着きつつも、本当はもう一個謝らないといけないことがある……と心のもやもやを抱える。

——スマホを見てしまったことを、まだ言えてない。
思わず後ろのポケットに入れてしまったのだ。

「俺も好き、大好き……唯香さん、」

「んっ……あ、そ、それで、あの……待って凜くん、私、もう一個謝らないといけないことが……っ」

私を抱き寄せてキスをしてくれる凜くん慌てて制止をしたけれど、凜くんは恐らく私が恥ずかしがっているだけだと思ったようで、そのまま腰を抱き寄せられる。

すると——

「イキそう？ まだダメ、我慢して……？」

「へ、……あ……っ！？」

「……………え…………？」

「クリかりかりするけど、まだ我慢だよ……？ そう、いい子……」

「あ、わわわわ……っ」

「……………これ、って……」

抱き寄せられたことでストップをしただけのスマホがまた、再生してしまった。私は再度青ざめて、ポケットに入れてしまったスマホを取り出し再生を止める。

「ほ、本当に……ごめんなさい……」

「……………どういふこと？ 唯香さん」

流石に少し怒ったような凜くんの声音に立つ瀬もなく頭を下げる。

ぽそぽそと小さな声で、凜くんの指の動きでパスワードがわかってしまったこと、そうしてメディア欄を見ているうちに今のボイスに辿り着いてしまったことを白状した。

「唯香さん……………」

「うう、ご、ごめんなさいい……………」

「……………それでこれ、聞いてたの？」

そんなことを聞かれると思わなくて、思わずびくりと肩が震える。

凜くんは感情の読めない瞳でこちらを見ている。私はしばらく目線をうろうろとさせてから、こくりと頷いた。

「これ……………」分くらい進んでるよね？ ……ずっと、聞いてたんだ」

「……………ううっ、はい、聞いてました……………すみません……………」

「……………どうして？」

凜くんの涼しげな瞳から注がれる視線に私は狼狽える一方で。

「えっ……？ えっと……その、凜くんの声が、か……かっこよかったから……」

「かっこよかったから、こんなエッチなボイス」〇分も聞いたの？」

「それは、だって……エッチなのだと思ってなかったんだもん……！」

「結構すぐわかったでしょ。エッチなのだって」

「うっ……」

言い返すことができずに俯く。流石にこの音声聞いてオナニーしていました、なんて言えるわけではない。

口を噤んでいると、凜くんはとりあえず座ろうか、と部屋のソファ―に座るよう私を促す。私は凜くんにスマホを謹んでお返しし、肩を縮こめつつ座った。

やばい、お説教タイムだ……。

「……それで、どう思った？」

「へっ……??？」

隣に座った凜くんが屈んで顔を覗き込む。相変わらず感情が読めない。

「どう……って……？」

「感想。どうだった？」

「え……っと、格好いい……し、いつもと……ちがうな、って」

「台本だからね」

「あっ、そうなんだ……！ でも、こっちの凜くんも好きだし、……ちょっと嫉妬しちゃったかも、なんか……他の女の子も、聞いているのかなあって」

「ふ、……唯香さんと付き合うようになってからは撮ってないよ」

「そうなの？ それなら、よかった……？」

感情は読めないけれど、どうやら怒っているわけではないみたいだ。

なんでこんなことを聞かれているんだろう、と思っていると不意に頬を撫でられた。

「……興奮した？」

「へっ……」

まっすぐに見つめられて頬の熱が上がる。

答えられないまま口をぱくぱくさせていると——ふっと笑われてしまった。

「したんだ」

「はっ、えっ、なんっ」

「正直に言って、唯香さん」

「うっ………はい、しました………っ」

すっかり顔が火照っているのが分かって、もう言い逃れできない……と観念して頷く。
その瞬間に視界が反転した。ソファに、押し倒されてしまった……？

「嬉しい……唯香さん」

「えっ、えっ？ 凜くん、どうし……っきゃ!？」

「引かれると思ってた、こういうの……俺、唯香さんのクリ、ずっと……いじめたかったん

だけど——もう、我慢しないでいいんだ」

さっき聞いた音声よりもよほど熱っぽく囁かれながら、スカートを捲られる。さっき自分で触っていたそこはもう濡れてしまっていて、見られたくなくて身体を振る。

いつもならすぐに身体を引いてやめてくれるのに——今日の凜くんはびくともしない。

「だめ、凜くんっ、見ちゃ……っひ、っ♡」

「……濡れてる……唯香さん、俺のクリ責めボイス聞いて、おまんここんなに濡らしてたんだ……？」

パンツが濡れているのを見られてしまって、嬉しそうな声で囁かれながらくちゅりと布越しに撫でられる。

「あう……♡ 待って、凜くん、恥ずかし……っ」

「やだ、待たない……はあ、唯香さんのクリ……パンツの上からでも分かるね……聞いてたの、ここカリカリされるとこだったよね……？」

「うう……っ、……あ、……っ♡ かりかり、だめ……っ♡」

すりすり♡ くにくに♡

かりかりかりかり……♡

（凜くん……ボイスより、全然感情入っちゃってる……♡ 自分でしたときより、優しい手つきでかりかりされるの、むり……♡♡）

「ずっとずっと、このクリ俺の手で大きくしたいって思ってた……唯香さん、勝手に俺のスマホ見たお仕置き、していいよね……？」

「あっ、う……♡ んん♡ ……っずるい、そんな……っ」

断れないよ……!!

恥ずかしくて顔を隠すと、隠しちゃダメと囁かれる。しゅるりと音がしてネクタイを外す音がしたかと思ったら、そのまま両手とも頭の上へとまとめあげられ、縛られてしまった。

(こんなこと……されたこと、なかった……♡)

「息ふーふうしてる……縛られて興奮してるんだ？　はあ、可愛い……唯香さん、こんなエッチな子だったんだね」

「そ……それは、凜くんだから……っあう、う……♡」

「もう、マジで可愛い……俺の手でもっとエッチになって、俺だけでしか満足できない身体になって、唯香さん」

すりゆすりゆ♡

カリカリカリカリ♡

さっきより激しくクリを引っ搔かれて腰がビクビクと震える♡

「ずーっとこうやってパンツの上から触っててもいいんだけど……もう勃起しきってるね、もしかして自分で触ってた？」

「っ………！？　さ、さわって、な……っんあ♡　あう♡　やあっ、あゝあ♡」

ピンッピンッピンッ♡

慌てて首を振ると嘘はよくないって言うみたいにくりをはじかれる。なんで、バレちゃってるの……っ？♡

「本当に？　ここ、自分で触ってない？」

「ひっ、あっ♡　う、うっ……さわ……さわって、ましたあ♡　ごめんなさい……っあ、あ♡♡」

「俺の部屋で、俺の声聞いて……オナニーしてたんだ、唯香さん」

低い声で囁かれてぶるるっ♡　と身体が戦慄く。

クリトリスをかりかり♡　すりすり♡　する手は止めてもらえないまま、耳元へと吸い付かれる。

「——そんな変態だったなんて、知らなかった。気付いてあげられなくてごめんね、いつでもどこでもクリびんびんにさせて俺のちんぽ欲しがっちゃう立派なド変態にしてあげるからね……♡」

「やっ、そんなの、あ、あ♡　だめえ……っ♡♡」

ぐちゅ……っ♡

ぬるぬるぬる♡　くりゆくりゆくりゆ♡

凜くんの手がパンツの中に入って来て、溢れる愛液を掬い取ってクリトリスに塗り付ける。蕩ける顔を隠したいのに手首をがっちり縛られているから何もできない。

（こんな、無理やり犯されて、調教されてる、みたいな……♡　それなのに、いつもより、興奮しちゃってる……っ♡）

「ねえ、いつもよりおまんこところだよ、唯香さん……？」

「んん、やっ………言わないでえ……♡」

「ああ………ところだけど、直接は触んなかった感じ……？　まだ皮被ってる、かわいい赤ちゃんクリトリスだね」

するとパンツを脱がされて、思い切り足を広げられてしまう。

間近で観察するみたいにしっくりと見られて、ふーっ♡ ふーっ♡ と興奮しきった恥ずかしい呼吸が止まらない。

「まだシコれるくらい大きくないね…ああ、でも皮は剥けそう」

皮をくい♡ と引っ張られて勃起したクリトリスを露出させられてしまった♡
指先でくりゅ♡ くりゅ♡ となぞられて足の先まで力がこもる。

「あ、びっ…♡ ひ、凜…くんっ、それ、むりい…♡♡」

「これだけで無理なの？ まだいけるでしょ？ ほら、すりすり、すりすり…♡」

すりすり♡ こりこり♡

すりゅすりゅすりゅ…♡

耳元で囁かれながら指の腹で何度も露出したクリトリスを撫で擦られる。
あまりの刺激に足がピンと張ってしまった。

「ふ、足ピンさせててかわい…気持ちいい？ どこが気持ちいい？」

「あう、あっ♡ ううっ、く…くり、きもち、い…っ♡」

「いい子…このままいくまでずーっとぬるぬるの指で擦るから、腰浮かせて集中して…？」

柔らかい命令に逆らえず、凜くんにおまんこを差し出すみたいに腰を持ち上げる。

不安定にへこつく腰に合わせて指をびた…♡ とクリの先っぽに添わせられて、それだけで荒い息が漏れる。

すりゆすりゆすりゆ♡

こりゆこりゆこりゆ♡♡

「あ♡ あっ♡ つ…これ、待っ…っあ♡♡」

「待たない、このままイって、唯香さん」

「だめっ、あ♡ こんな♡ すぐ、いっちゃ、…っ♡」

「いいよ、イって？ ほら、イけ♡ 皮剥いたクリトリス直接カリカリされてイけ、イけ、

イけ…っ♡

カリカリカリカリ…♡

ぬるついた爪先で何度もクリを弱く擦られて♡

「あ、あっ♡　だめ、イク、イツ…イツちゃっ、~~~~…ツツ!♡♡」

びくびくっ!　と身体を震わせてイってしまった。

余韻に荒い息をついていると、ふと違和感に気づく。

——いつもなら、凜くんは私がイクとすぐに抱き締めて、落ち着くまで待ってくれていた。その時間はすっごく幸せで大好きなんだけど…今日は引き出しからごそごそと何かを取り出している。

「凜くん?　…っあ!?!♡　ま、待って、なに…!?!」

「ずっと——いったばかりの唯香さん、いじめたかった。いったあとのまんこにこれ押し当てて、泣いてもやめないでイかせまくりたい…って、思ってたんだよね」

カチと、スイッチの音がする。私の拳より小さいくらいの、ピンク色の丸い…おもちゃ。熱っぽく注がれる視線に固まった私は、吸盤のような部分がクリトリスにかぼ♡と嵌められるのを見ていることしかできなかった。

「……っあ、あ…っ!?!♡ りん…くん、なに、ま、ってえ♡ あ♡ とめてえ…っ♡」
「だーめ、これで唯香さんのクリ大きくするから。ちょっとはじいただけでいく立派なクリちゃんぽにするから、頑張って」

「ひ、あ♡ そんなの、むり♡ クリちゃんぽ、なれないい…っ♡♡」
「ふ…:可愛い、なれるよ、唯香さんなら」

きゅぽ♡ きゅっぽ♡
ちゅぽちゅぽちゅぽ…っ♡♡

イきたての敏感クリを勢い良く吸われてがくがくと腰が揺れる。
そんなお構いなしみたいに身体を抑えられ、またパンツを穿かされてしまった。凜く

んの両手が離れても止まらない刺激に襲われる。

「やぁ♡ あぁ♡ りんくん、これ、つよすぎる、よぉ♡♡」

「唯香さんのクリ大きくするためだから、頑張って？ いっぱいいっていいよ、手伝ってあげる」

「んむ、う……っ！？♡ んん♡ はぁ……っ♡」

覆い被さった凜くんから深いキスが降ってきた。熱を帯びた舌を絡めてぬりゅぬりゅと擦られ、それだけでも力が抜けるのに、クリトリスは吸われ続けたままで。

更に空いた両手でブラを外されて、むにゅ…♡ と柔らかくおっぱいを揉まれてしまう。

（あ…♡ 私、乳首も触られちゃうんだ♡ もう気持ちいいのに…こんなの、またすぐいっちゃうよお…♡♡）

「……期待してる？ 唯香さんの乳首、ぴん、って…勃ってきたね」

「……うづっ、…も、恥ずかし…っ♡」

「触られてないのに、見られてるだけで勃起して可愛い……ここもカリカリがいい？」

カリカリ♡ きゅぽきゅぽ♡

乳首からもクリトリスからも気持ちよさが襲ってきて顔が蕩けてしまう。

「それとも、きゅって摘まれるほうが好き…？」

きゅ♡ こしゅこしゅ♡

ちゅぽぽぽぽ…っ♡

「ひぁ、あぁっ♡ どっち、も…きもち、い……っ♡♡」

「何それ、可愛い……そのうち乳首だけでイけるようになるうね」

「やあ、できな、あっ♡ だめえ、凍く……っまた、イきそ、♡」

絶頂の快感から降りられないまま責められ続け、すぐに波が襲ってきた。

くい♡ くい♡ と腰が揺れて恥ずかしい。それなのに凍くんは嬉しそうに笑って、カ

リカリカリ……♡ と乳首を甘く引っ掻き続ける。

「いっていいよ、乳首気持ちいいのとイく感覚繋げようね。ほら、身体反らして？ イけ、イけ、イけ……っ♡」

ちゅぽ♡ ちゅぽ♡

かりかり♡ こしこしこし……っ♡

クリトリスを吸われたまま耳元で囁かれて、爪先で乳首をカリカリされて♡

「ひ、あぁっだめ、イク、イクう……っ……っ♡」

あっけなくまたイってしまった。

びくん、びくんと腰が震える。イっている間もおもちゃのきゅぽきゅぽ♡ という甘い刺激がずっと襲い続けて、それなのに手首は縛られて下半身は凜くんに抑えられて逃げる余地もない。

「は、ひっ♡ りんくん、いったあ♡ いったからあ♡」

「すぐイっちゃったね、かわいい……ちよっとは大きくなったかな、唯香さんのクリ」

パンツをずらされてようやくおもちゃから解放される。私は荒い息をつきながら、本当に大きくなってしまったのか凜くんの様子を見ようとする——凜くんのスマホが、鳴った。

「げ……………うわ、もう会議の時間だ……」

「あっ凜くん、そっか、お仕事……!」

一気に不服げな口調になった凜くんは、それでもすぐに仕事モードの顔になって電話に出る。

はい、もう家を出ていたので先程戻ったばかりで、すぐ準備します、なんて飄々と答えていてこちらの方が所在なざげになってしまった。

「……………はー…………ごめん、唯香さん。会議出なきや」

「ううん、わ、私こそお仕事中に本当にごめんなさい…………!」

するりと手首を縛っていたネクタイを外されて、擦れて少し赤くなったところをキスされる。それだけでなんだか照れてしまって、無言のままもぞもぞとパンツを履き直していると、凜くんがダメ、というように制止した。

「会議終わったら午後休にするから、これつけて待ってて」

「へ……っ？ なに……あつ、え……！？」

先程解放されたと思ったのに、またきゅぽ♡ と音を立ててクリトリスにおもちゃの吸盤みたいなのを嵌められてしまった。

「ひ……っ、凜くん、むり、むりだよお、こんな……っ♡」

「大丈夫、一番弱くしておくから——……ふ……、唯香さん」

「……？」

「無意識だと思うけど……すっごい期待した顔してる。えっちで可愛い」

愛おしげに頬を撫でられて恥ずかしさに全身の熱が上がる。
固まってしまった私を気にすることなく、嬉しそうにキスを落とされた。

「終わったから、ここ確認するから。ちゃんとつけてられたら、いい子いい子ってクリ撫で撫でよしよししてあげてあげる。唯香さんが気持ち良くて泣いちゃうくらい」

「~~~~っう……♡ や、だあ……♡」

「やだやだしてもダメ。今まで散々我慢してきた分触らせて」

柔らかく口付けられて、名残惜しそうに身体を離される。このまま俺の部屋で俺のボイス聞いててもいいよ、と笑って、凜くんはリモート用の書斎へと行ってしまった。

ぱたりと閉じた扉の中で、弱く吸われる感覚に身体を震わせながら、私は為す術もなく――凜くんが置いて行ったスマホを、ただ握り締めていた。